

小説同人誌評 36

『ココドコ』と 『麦笛』、そして 細見和之

今回はいつもよりも多く雑誌が届いていた。コロナからの回復の兆しでもあるかもしれない。そのなかで、この一冊という同人誌は残念ながら今回は見あたらなかったが、逆に言うと、拮抗している優れた雑誌が何冊かあったということでもある。

『ココドコ』第3号はそういう一冊で、不定期刊といいながら、前の第2号からかなりハイペースでの刊行となった。同誌の巻頭に掲載されている、田中さるまる「前夜」は、脳内動脈瘤という危険な病気であろうという手術を受ける前夜の「僕」の意識を描いている。とはいえ、いわゆる「意識の流れ」を記述するスタイルとそのままイコールではない。むしろ「僕」の意識はぶつぶつ途切れるのだ。「僕」が病院の前のバス停のところではビールを飲み、煙草を吸い、高校生に気持ち悪がられる……といった場面が微妙にずらされながら反復的に記述される。おさらく入院前に

見た最後の光景が夢のなかのように繰り返されているのだろう。そのなかで「僕」は別れた結婚相手・弥（あまね）と生きなおす可能性を垣間見る……。

エンターテイメント風のスタイルでも器用な作者だが、ここでは脳内動脈瘤という病を背景に、真摯な姿勢が貫かれている。

エンターテイメントといえば同誌掲載の、内藤万博「逃亡犯回収業者」（フュージティブ・リカバリー・エージェント）→エンバミング3」が相変わらず軽快である。

トリスタンとウィツカーマンが精神病院を舞台上に暴れ回る。ただし、今回、ウィツカーマンはベンジャミン・ウィツカーマンという本名で、しかも「逃亡犯回収業者」という本業で登場する。

トリスタンは彼の祖父の開発した死化粧（エンバミング）の技術が種々の犯罪に悪用されている場面で、その遺骸をきちんと葬ることを続けている。今回は精神病院で遺体がまだ生きていたかのように装われ、補助金が騙し取られていたというわけである。元は刑務所だったという精神病院の複雑な構造など、私はまたしても感心させられてしまった。

同誌掲載の、鶴川澄弘「草原の煙突群」は、三部構成の作品。冒頭、「僕」こと高宮が大学の後輩の鶴岡、それに鶴岡の知り合いの女性・畔上が、各地の遺跡について語り合う。場所

は青森県の、たがいに行きつけらしいホステル。そこから、「僕」がアウシュヴィッツの第二収容所、ビルケナウの印象を、廃墟としての遺跡として長く語る。最後は、ふたたび三人のやり取りとなつて、ビルケナウこそは「訪れるべき世界遺産」と語り合う。私自身訪れたことのある場所だが、タイトルにあるとおり、ビルケナウに残っているバラック小屋の残骸としての煙突を「草原の煙突群」と捉える感覚が新鮮だった。

同誌掲載の、青木和「最果て月」は同誌2号掲載の「行き逢い月」の続編。

前号に続いて、塩採りの男、少年テロ、幼い少女アカザのほか、新たに（よろず屋）が登場し、その（よろず屋）を探している、マントの男ヒカが不気味な姿を見せる。塩採りの男は（よろず屋）に地図を探してくれるよう求めていたのだが、その（よろず屋）はヒカによつて残忍に殺される。（よろず屋）が持ち込んだ毛皮についていた「ユジ虫」によつてヒカの村人は絶滅していたのだ。

これから塩採りとテロ、アカザは「北」にむけて長い旅に出るようだ。いったいどんな物語として展開してゆくのか。

『麦笛』第20号にも力作が並んでいる。同誌掲載の、高橋道子「蝶の舞う家」は、高校時代バレー部に所属していた女性たち数名が五十年以上の歳月を隔てて、一同に会し

ている姿を、そのひとり「景(けい)」を視点人物として描いている。

元高校の同級生だから基本的に仲がよいのだが、その後のそれぞれの生活やいまのありかたをめぐって、相互に抱えているものもある。聞きたくても聞けないがいの家族の事情もある。お酒がまわると思わぬ人物評も飛び出してくる。そのなかで、同じバレー部に所属しているながら、高校を中退し、企業爆破事件の関わりで逮捕された民子のことを景は思い出す。その民子がしばらく前に「カエルとタンポポ」という本を出版したことを景はみんなに告げる……。

この民子との関わりをもうすこし膨らませて書くことはできないものかと思う。タイトルにある「蝶の舞う家」はみんなが集っている、山間部にある、元バレー部のメンバーのひとり・夕美の家のことだが、同時にさまざまな記憶と思いの舞っている家でもあるだろう。

同誌掲載の、渡辺周志「塗りつぶされた翼」は、練炭自殺にむかうために車に乗っている五十歳前後の小林昇、川上康、若い木下結のねじくれた関係を、小林の視点で描いた、四百字詰め換算で百枚弱の力作。

冒頭、車を運転しているのは小林だが、彼は当初、練炭自殺のことは知らされていない。小林が精神病院へ短期入院して退院する

ときに、同じ病院に通院していた川上が小学校の同級生と名乗って声をかけてきたのである。川上と木下はインターネットをつうじて知り合ったようだ。ともに精神科に通って自殺願望が強い。途中でもうひとり自殺志願の女性が現われて、小林と運転を交代することになっていたのが、その女性が姿を見せない。川上は小林に小学校でいじめられていて、それ以来精神が不安定になって、いまは小林を殺すつもりだ、と木下は小林にこっそりと打ち明けたりする。結局、練炭自殺は行われぬのだが、三者のあいだになにか和解的な関係が成立するのでもない。唯一希望の方向としては、ときおり人間ではなくて自然にむけられる小林の眼差しだけである。

全篇をつうじて交わされる小林と川上と木下の噛み合わない会話を噛み合わないままに執拗に綴る作者の筆致には、大きな可能性が孕まれている印象がある。若い作者の今後に大いに期待したい。

同誌掲載の、竹野滴「イニベン」は、一見タイトルが分かりにくいだが、そのまま漢字の「ニンベン」を意味している。主要な登場人物に「佐藤さん」がいるが、その「佐藤さん」が主人公の意識にとってはニンベンの「左藤さん」になったり平仮名の「さとうさん」になったりするのである。

軽度の精神障害を抱えている「ぼく」は、

作業所で仕事をしながら、同時にヘルパーとして介護にも出ている。そして、同じ作業所にいる蓬澤愛と間もなく結婚することになっている。その「ぼく」の日常が漢字にたいする執拗な、ときにはユーモラスな考察を含みつつ、淡々と記されている。同時に、「ぼく」には優れた配管士であった父が震災(阪神・淡路大震災と思われる)後の多忙な生活のなかで死んだという過去がある。

作者は多様な文体と語り口で作品を綴ってきたが、この作品がまた新境地であることは確かだ。

『あるかいど』第73号では、切塗よしを「レス」が冴えている。

「わたし」は設計事務所を開業している身でありながら、パソコンで図面を書くCAD(キヤド)の初心者用講座に出かけている。「わたし」の名前は「楠木」で、その講座で最終的に「わたし」は「タスマトファミリー」という家の図面をパソコンで書き上げてゆく。

その合間に、そこにいたるまでの「わたし」の過去のエピソードがじつに手際よく配置されてゆく。

「わたし」はかつて市役所に勤めていたが、市民文化会館の建て替え計画のために、市民説明会に出ずっぱりで、家庭を顧みないまましていると、息子は高校進学を拒絶。市役所の部下が自殺した絡みで「わたし」はパワハラ

の疑いをかけられ辞職に追い込まれ、いまは妻から弁護士をつうじて離婚を申し立てられている。

踏んだり蹴つたりの人生だが、「わたし」は講座で図面を書きながら、妻が献身的な努力を重ねていたことにも気づく。自分を除いた形でファミリーは着実に存在していたのだ。「わたし」は離婚手続きに同意することを決意して、最終的に「クスマトファミリー」の図面を削除する…。

後半はいささか駆け足となっている印象があるが、ここでは図面の作成と記憶の問いなおしが見事に重ねられている。

『私人』第108号掲載の、根場至「塞室」はよくまとまった好短編。

「私」はオランダ、ロッテルダム製のビルで五階で、東京本社への月ごとの報告を書く仕事で残業をしていた。夜の九時に仕事を終え、エレベーターで下りてゆく。四階で別の日本人が乗ってくる。しかし、そのエレベーターは三階を過ぎたところで急停止してしまう。こうして、ロッテルダムで仕事をしている初対面の二人がそこに閉じ込められてしまう。二人はぎこちないやり取りのあと、自分たちが置かれた状況を石川啄木の「時代閉塞の現状」を踏まえて「塞室」などと呼び合う。「密室」が内側から鍵をかけた状態であるのにたいして外側から鍵をかけられたのが「塞

室」というわけである。「私」は学生時代、七十年安保の際に逮捕された経験を語り、相手は六十年安保のときに逮捕されたと伝える。

時代設定は一九八〇年代の後半、「塞室」という状況はその後、いっそう加速してきたとしかいいようがない。

『野火』第38号掲載の、北原行雄「九条真理子の場合」では、大学の医学部を卒業して、精神科医の道を選らんだ「ぼく」の若い時代の体験が、若い女性患者・九条真理子との関係を軸に綴られている。

「ぼく」が九条真理子に振り回されるような場面のと、最後はその九条真理子の「ケース検討会」の様子が議事録風に描かれている。この構成で作者はなにを伝えたかったのか、そもそもこの作品の主題はなになのか、もうすこし踏みこんだ記述がほしい。

時代は一九七〇年代半ばぐらいだろうか、精神科医のあいだで既成の精神医療にたいする強い批判、「反精神医学」や解放病棟をもとめる運動がまだ続いていた時代である。作品には、「精神科闘争」や「全国精神科共闘会議」といった言葉が登場する。「ぼく」はそれらの運動にのめり込むというよりは、距離を置いて見ている感覚があつて、時代の証言として貴重である。

『西九州文学』第49号掲載の、寺井順一「オユン」は、モンゴル人女性「オユン」と「私」

の結婚をめぐる、四百字詰め換算百枚弱の物語。「私」は会社の海外事業部に属していて、モンゴル滞在中にオユンと出会ったのである。

冒頭は、「私」とオユンの長崎での結婚式からはじまる。「私」はオユンとの結婚を心からうれしく思っているのだが、心配の種がひとつある。母親がロシア人嫌いであるがゆえに、ロシア人の血を引いているオユンをむしろ日本人の血を引くものと偽ってきたことである。友人の知恵も借りて、「渡辺正」という架空の人物を設定して、それをオユンの父親などと説明していたのである。

祖父（「私」の曾祖父）がシベリアに抑留されシベリアで死んでしまったことから、ロシア人だけに心許してはならないと母親は考えている。そして、シベリアから届いていた祖父（曾祖父）の長い手紙を「私」に読ませたり、満州国、ソ連、モンゴルの歴史を記した長い手紙をオユンに宛てて書いたりする。こういう関係のなか結婚後しばらくして、オユンは憔悴してゆく。そして「私」にたいして、日本の歴史の勉強だけをもとめる態度は「フェアでない」と告げる。「私」はあらためてモンゴルの歴史を学ぶことを考えるが、そんなときオユンの母ドルマーが病気に罹っているという連絡がモンゴルから届く…。

「私」の姉がオユンと「私」の母親とのあいだに入って、二人の関係は回復してゆくこ

とが示唆されている。国際結婚が第二次世界大戦の傷といまなお切り離せないことを描いた真摯な作品だが、全篇をとおして、「私」が日本の被害については語っても加害についてはいっさい口を閉ざしていることに私には正直違和感がある。

『たまゆら』第124号掲載の、那村洵吾「道外れ」は、優れた海外の短篇をまるで翻訳で読んでいるような印象。

三十四歳の女性である「私」が幼い娘を連れて、海辺にある故郷に戻って来る。高校を卒業して以来のことだという。さびれた駅舎を過ぎると昔と変わらず理髪店がある。娘がここで髪を切ってもらって、と「私」にいう。髪を切る男性と店番をしている女性は夫婦ではなく兄と妹。兄は高校時代から忘れられないひとがいて、いまだに独身なのだとは「私」に告げる。高校最後の記憶をたぐって、その相手が自分であることに「私」は気づく。やがて「私」と娘は夫のDVから逃れて故郷にまでやって来たことが明らかになる。理髪店の名前は「ルヴォワール」と改称されていてフランス語で「再会」の意…。

この作品では、とくに娘の発する言葉がまるで神話のなかの啓示のような深みを持っている。むしろ「私」はその娘の言葉のひとつひとつに導かれているかのようなのだ

『せる』第121号掲載の、津木林洋「遠い出

自」は、主人公の山川珠雄が自分のほんとうの父親を探り当ててゆく物語。

旅行ライター山川は、コロナ禍で仕事がなくなくなるなか、小説の執筆を思い立つ。父親の「軍事日記」をネタにしようとして、そこで父がおたふく風邪に罹り、無精子症になっていた可能性に気づく。羽振りのよかった祖父が実の父であるかもしれない、と山川は考える。

老人ホームに入居している高齢の母に祖父のことを尋ねると、跡取りができないと離縁だといわれて、と母は泣き崩れる。そんなとき、孫が生れたと姉が久しぶりに電話をかけてくる。自分たちは祖父の子ではないか、と問いかける山川に、姉は別の父親の存在を告げる…。

どうやら山川も姉も母の不倫による子どもであったというところに落ち着くのだが、老人ホームでの母との面会の場面といい、山川が自分の出自を追いかけるきっかけといい、この作品ではコロナ禍が大きな役割を果たしている。

『空とぶ鯨』第22号掲載の、山内弘「家族のポートレート」は、破綻しかけていた夫婦がかううじて関係を回復しゆく姿を、娘の視点から描いていて、秀逸。

大学生の愛理の両親は別居状態で、離婚の手続きも進んでいる。母のほうが元の家を一

方的に出て行った形で、愛理は父と暮らしている。あるとき愛理は、母が経営しているカラオケスナックに呼び出され、母の口から脾臓癌に罹っていると知らされる。愛理はそのことを父に知らせたい一方で、母の店での出会った、母と親密な関係にあるような大辻という客のことが気なる。そんなおり、大辻から母が吐血して入院したという連絡が入る…。

直接的な原因がなくても、いろんな行き違いやから夫婦の関係はもつれたりよじれたりする。簡単には譲れない互いのプライドもある。母の重篤な病気を代償としてではあるが、そういうもつれのひとつひとつが解きほぐされてゆくありさまが、娘の視点で描き出されている。

なお同号では、同誌の事実上の主催者であった高畠寛の追悼特集が組まれている。

『北方文学』第86号掲載の、柳沢さうび「瑠璃と琥珀」は、四百字詰め換算百枚を超える分量で、さながらドイツ・ロマン派の幻想的な文学世界を彷彿とさせる。

転校を繰り返していた「ぼく」は小学校の半ばから過した学校で、絵の巧みな少年・真夏と仲良くなる。真夏の誘いで、額縁屋と呼ばれるところで絵画と一緒に習うことになる。しかし、二人は同級生からいじめられ、堀に落ちることになる。「ぼく」は無事だったが、真夏は溺死してしまう。以来、「ぼく」は真

夏という存在も担うようになってゆく。

「ぼく」は高校を卒業したあと、青いブラウスを着た不思議な少女と出会い、クロッキー帳にデッサンを描く。「ぼく」は彼女をオートバイの後ろに乗せて走ったりもするが、その少女が真夏の、年の離れた妹であることを知る…。

この作品は、子ども同士の暴力、親子間の虐待、フロイト的なエディプス・コンプレクスなどにくわえて、絵画論までも組み込まれていて複雑な作りになっている。「ぼく」に絵を教える「繪具屋」は、ゲーテの教養小説などで主人公を導く謎めいた教師そのものだ。複雑な作りという点では、『黄色い潜水艦』第75号掲載の、島田勢津子「藜（ケ）の日ハシの日」もそうだ。

「私」は歌を習っていて、夫の高山は役者をしているという設定。ただし、夫は役者を専業とするのではなく、別の手立てで何とか生活している。二人は四十年近くもそういう暮らしを続けてきた。小劇場が勢いをもっていた時代は遠のいたうえ、コロナ禍がそれに拍車をかけている。それでも、夫の高山は外部オーディションを受けて、チェーホフ『カモメ』の舞台に出演するのである。

その舞台の展開する模様を差し挟みながら、高山の所属する劇団の主催者・北野とそのパートナー・綾香をふくめた人間関係が「私」

の視点で振り返られる。綾香はかつて北野の劇団の看板女優でありながら、すでに二十年前に女優をやめている。阪神・淡路大震災が大きな打撃をあたえもしたのだ。

お互いに言いたいことを言い、したいことをしてきたはずの四十年だが、舞台の役者の言葉をつうじてしか言えないことや聞けないこともある。逆に、現実の生活のほうがないかを演じている舞台のように反転したりもする。なにが本音であり現実なのか、そういう問いかけがここからは響いてくる。

『AMAZON』第515号掲載の、蜷川崇「阿弥陀の手記」も手が込んでいる。かつて小説家も志していた女性の「私」が、近所の「達郎さん」が語っていた彼の長い人生の物語を語りなおすというスタイル。

かつてプロ野球選手だった達郎は、二軍暮らしを続けたあとに引退。自分の不手際からあるときから妻と肉体関係がもてない状態のまま暮らし、とうとう六十歳を過ぎて下関の実家に戻る。そのあいだに妻の景子は原因不明の病気で亡くなる。以来、達郎は死んだ景子の幻影に追われつづけるようになった…。

作品に繰り返し登場する曼珠沙華の風景に、不器用な夫婦の魂が揺曳している作品。それをひとり語りのような文体で描ききる作者の技量はやはり卓越している。

『風の道』第18号掲載の、荻野央「疎林」は、

樹木がまばらに生えている光景に、複数の人間がかるうじて生きうる姿を託している。小説作品なのだが、全体に散文詩のような印象がたただよう。実際、作中には「人もまた、一本の樹ではなからうか」とはじまる吉野弘の詩「樹」（詩集「北人曾」所収）が全文引用されている。むしろ、この詩を小説へとパラフレーズしたものが本作という印象すらある。会社という組織のなかでサラリーマンが感じる悲哀は、吉野弘の初期の大事なモチーフでもあったのを思い出す。

『VIKING』第864号掲載の、夏川龍一郎「続・代行運転日誌」は、「私」が「代行運転」という仕事を短期間続けた日々を、日誌形式で綴った作品。以前に同じく代行運転をネタに作者が作品を書いていたことから「続」と記されている。

「代行運転」とは、飲み屋などで酒を飲んだ客自身の車をその客に変わって運転する仕事だが、私はその仕組みもよく分かっていた。二人が一組になっていて、一人が客の車を運転し、もう一人がその車を別の車で追いかけて、帰りはあとの一人が先の一人を乗せて帰るのである。「私」はその後者の役割を任されるのだが、けつして器用にこなすことができない。最後は当たり屋にひっかかって、あつげなく解雇されてしまう。ひょうひょうとした文体で一気に読ませる。